

第5章 札幌トモエ幼稚園における 基礎的人権教育の実践

第2節 生命の誕生の不思議と神秘を基礎とする脳生理学的実践

ひとりの人間の生命は、一組の女性と男性の「信頼関係」から生まれる。

結婚相手について十分に理解していないにもかかわらず、人は互いに心魅かれ、信じ合い、夢を共有し、共に生活したいと願う。女性と男性の間の「信頼」なしには、人間は生まれてくることができないのである。

生命は女性の胎内で10か月間育まれる。その過程を詳細に考察すれば、人間の生命がこの世界に誕生することが、いかに不思議であり神秘的であるかを実感できるであろう。生命の誕生の不思議と神秘を探究することから、自己および他者の生命の尊厳を体感することができるのである。

信頼が基盤となって、女性は自らの胎内に生命を宿し、育み、ひとりの人間を世に送り出す。子どもを産むことができるのは、女性だけに与えられた特権である。

しかしながら、女性のみが持つこの特権の大きな価値は、重要視されているとは言い難い。当の女性自身が、女性であることの重要な意味を実感できない社会になっているといえる。

すべての人間は、信頼によって母の胎内で生まれ、生まれてくる。その当然の事実が忘れ去られているのが現代である。これが、人間を人間として育てることが困難になっている大きな要因のひとつであろう。

トモエでは、女性が女性自身の存在価値を認識し、母としての誇りと確信を持てるように指導している。女性の意識が高まり、夫婦で互いに思考し合うことで、男性も自分自身の生命の不思議と神秘を感じ、人間の尊厳を実感できるようになるのである。

人はすべて、母の胎内で抱きしめられるように生まれ、ひとりの人間として誕生し、母親の胸の中で抱きしめられて、情緒が安定した人として育つことができる。本来ならば、動物的な本能によって自然に形成されていくはずの母子関係である。しかし、現代社会では都市化や核家族化が進行して、自然な子育てができる生活環境が失われつつある。新米の母親の子育てを支援すべき地域社会の教育力も、父親や祖父母など家庭内の教育力も、どんどん衰退している。

乳児とふれ合うことによって、生命の不思議と神秘を体感し愛おしむことができるのであるが、その余裕のない母子関係が急速に広がっている。「母子カプセル化」し、歪んだ親子関係は、「家族依存症候群」へと進展していく危険にさらされる。親が子どもに依存して、大きな精神的障害を与えてしまう例が増えている。

トモエには、母親たちの中に常に何人かの妊婦がおり、乳児も生後30日目くらいから参加している。スタッフも親も子どもたちも、次第におなかが大きくなっていくお母さんや生まれたばかりの赤ちゃんに、日常的にふれている。そして、生命の鼓動と愛おしさを体感し合っているのである。

事例(8) 妊娠・出産・子育ての中で、お母さんは何を感じているのか

下記のレポートは、元看護師の女性の、結婚・妊娠・出産・子育て・専業主婦としての日々の、赤裸々な体験記録である。

ひとりの生命が、母となる女性のどのような体験から生まれるのか。現代の女性が、妻として、母

親として、どのように生きているのか。それらを理解することは、基礎的人権教育の原点となる。特に男性は、妊娠と出産を体験することができないのであるから、女性がどのような存在であるのかを理解し、生命の誕生の基礎的な学びを夫婦で共有することが重要である。

結婚して、自分の家族だけが家族のあり方ではないと気づいたし、子どもが産まれてお母さんになるには、自分の成長が必要だと知った。でも、世の中の情報は、全てのお母さんには母性が子どもを産んだその時から溢れているはず、という“当たり前”が私の中にあり、混乱していた。

実際の私は、産後、家へ帰る日、いつもの助手席に子どもを抱いて座っていることに違和感を感じている。... “小さな命が私の腕の中で眠っている。” ...ってね。

そこには、自然と溢れでる愛で見つめ続ける、というよりは、ちょっと前の二人の生活から三人になった不思議な感じを、抱いた子どもに感じていた気がする。

妊娠中、私の場合、“幸せホルモン”が出てるんだなあっていう感じ。妊娠は嬉しかったし、お腹の子を愛しく思い続け、満たされて安定していたと思う。一方、仕事を産前1ヶ月位までしていたし、今までの自分のペースを妊娠で崩したくないっていう意地みたいなものもあった気がする。

だって、妊娠してから、出産後も変化し続ける身体と心は、驚きの連続。私は何も操作しないのに、子どもが育つために必要な変化が、私の身体と心に勝手にどんどん起きてくる。

幸せホルモンが私を満たす一方、妊娠中は、今まで作ってきた自分を守りたい、という気持ちも同じくらい強く一緒に動いていたと思う。要するに揺れ動いていたのだと思う。

でもその時には、自分が揺れ動いているとは自覚していない。妊娠という宇宙の営みの中にいて、自分の身体が、自分ではどうにもならない変化が、波のように押し寄せてくる。まるで赤いキャンディーを食べたメルモちゃんだ。あれあれ!?!という間におっぱいがムキムキ、モリモリと張り膨らんで(私の場合ね) すっきりとくびれていたウエストは丸みを帯び、ウエストだけでなくおしりだってモリモリ。背中だってアレアレって感じ。全ては自分の満足のために整えつづけたボディが...。全ては宇宙の意志の基に私のボディが変化していく...

子どもが子宮にいる満たされた幸せと、自分に起こる自分ではどうする事もできない押し寄せる変化に対する心持ちが、背中あわせに共存し揺れ動いていたのが、妊娠期間の心持ちだったと思う。

もちろん、ムキムキモリモリしてきた身体は、皮がひっぱられて中が重い感じや、足が腫れて痛苦しかったり、寝ていてもどこかが苦しかったりして、重く苦しくスッキリしない日々が続くのも現実です。命を産み出す身体の変化は、命を育むってすごい！ 宇宙の歴史が私の身体の中を動かしている！ 力の及ばない生命のつながりを体験し、自分がまた地球の自然の一部であるにすぎない事を、意識にのぼらずとも自分の中で経験させられていたと思う。やめたくても命を産み出さないと終わらない。産み出すまで、私の意志だけでは止めることも進めることもできない。自分の生命が共にどうなるか、全てを自然の流れの中にゆだねるしかない。想像以上の体験。

そうして、子どもが生まれると、次はとても現実的な日常の中に混乱してしまう私でした。

おーい、誰か、メルモちゃんの青いキャンディーで、このボディを元に戻してくれ~!!

以前よりももっと強い意志のもとに整えなければ定位置に戻らない各部所の頑固さと日々の忙しさにまぎれ、以前のような、美に対する努力を無視し、世にいうおばさんの世界を堪能し続けているのでした。

こんな話じゃなかった。書いているとエスカレートしませんか？ 書くことで気持ちが高まり、自分以上のことを書かないようにしたいですわ。

初めて妊娠して、お腹の中で子どもが動く時は、静かにうつぶせの時で、子宮のあたりで小さな泡がポコプクって動くみたいな感じ。“えっ!?”今何か?...、みたいな感じ。きっと、この頃から私の興味の主体は、愛して結婚した彼から、お腹の子と揺れ動く自分の変化になっていってしまったのかも。そうして、私の興味あるものにあなたも興味をもって!!と強く願い始めていたのかも…。あなたと私の子どもよ!と。

子どもが産まれても、驚きの毎日。“赤ちゃん”の存在。私の身体の変化。初めてのおっぱいの日々。熟睡感のない日々。泣き声をいつも、どうしてかな?と思う日々。そんな中、「お母さんは、赤ちゃんがどうして泣いてるか、わかる」らしいことを私も知っていたけど、私にはさっぱりわからない。情報だけ入ってくるけど、そういう日常(赤ちゃんがどうして泣いてるかわかるような、お母さんのスペシャリストと過ごす日常)は、私の生活の中には今までありませんでした。

子ども時代、いとこの世話をしたり、近所の小さい子と遊ぶことは、赤ちゃん好き、赤ちゃん知ってる、赤ちゃん可愛い、と自分の中に残っていたけれど、それは自分の子育てに、力になってくれるものではなかった。じゃあ、私の両家、両親は力になってくれたかな?と思うけど、時々会う仲では、励みにはなるけど力にはならない。この子との関わりの中に、具体的な方法や、私の中に子育ての発見を見せてくれる人がいなかった。

子育てをしない母猿のTVを思い出す。一匹オリの中で子どもを産むけど、抱こうとしない。おっぱいを与えない。何だか自分の中の不安と結びつく。

出産後、仕事をやめた。ポツンと社会から取り残された。仕事をしていることで、自分は支えられ認められていた。今は、子どものおっぱいとオムツと泣き声と抱っここの連続の毎日。家の中はいつも二人きり。時々友人や両親が訪ねてくれる程度。夫は仕事で夜は10時、11時が当たり前。初めての育児を苦しいと思った。皆こうしてずっと育児をし続けてきたのか、気になり始めた。とにかく自分が耐えられず、雨でも風でも、できるだけ子どもをつれて散歩をした。子どもを温かな眼差しで見ってくれる人に会うと励まされ、子どもを冷淡に扱う人に会っては寂しさを感じた。

子ども時代を思い出すようになった。自分がこのくらいの時はどうだったかな? こういう時、私はどういうふうに思ったかな? 私の両親はどう判断してたかな? 丁寧に思い出す程に、私の幼少期は冷たくて悲しい感じが全体を占めている。自分が受けた悲しい思いは、私の子どもの関係に影響し、それがとても辛かった。どうしようもなく子どもを受け入れられず、対等以上に怒りがこみあげ、怒り続ける自分がある。“どうしてこうなるの?”自分みたいな思いはさせたくないと思いつつ、どうにもならないで月日が過ぎていく。

そんな中、シュタイナー関係の本に出会った。その考え方は、気持ちよく私の中に入ってきた。いい考え方だなとか、ああそうだなと思うけど、やはり自分と子どもとの関係になかなかよい変化は出てこなかった。子どもが生まれる前は予想もしていない、自分と生活への葛藤の毎日だ。

子どもを授かる前は、母になることに、そんなに興味も魅力も感じていなかった。“子どもはいないと寂しいだろうな”くらいは思っていた。人が育ちゆくことなんて考えたこともなく、自分自身のために貪欲に生きてきた。でもよく考えると、子どものころ、自分より小さい子が可愛くて、お世話をするのが好きだったことや、幼稚園の先生という職業にも興味をもったことがあったり、子ども心に“私は子どもの心がわかる大人になるんだ”と意を決した事を思い出したりする。そう...そして今は、我が子に“母さんは、大人の世界にどっぷりつかっていて、子どもの気持ちがぜんぜんわかってない。子どもの世界にちょっとでもいいから入ってみたらいい。”なんて言われる始末。その通りです。私は子ども時代に戻りたくないと思っています。だって窮屈すぎるから。寂しいから。嫌われて

いるから。馬鹿にされているから。悲しいから。私の中からこんなものしか出てきません。そして、いまだに子どもにこう感じさせて、やめられない自分がかっかりしている自分がある。子どもを持たなかったら気づかなかった自分がある。だから私は、私をまるごと包んでくれるような温かな安らげるドーンとしたお母さんに憧れる。

事例（ 9 ） 親になるということの意味を問う

次の文章にも、母親の体験が綴られている。親となるということの意味を、考察することができるであろう。

子どもを産むと「神様」というものを信じざるを得ない気持ちになるのは私だけではないだろう。世の中には単に「偶然」という理由では片付けられない不思議が多すぎるということにイヤでも気が付いてしまうからだ。

だいたい我が子にやっと出会った時のあの神聖な気持ちを微に入り細に入り説明しても、パパにはそっくりそのままお伝えできないのは誠に残念！でもこれは母親だけの特権なのだ。（もちろん出産していなくても理解できる人は沢山いるだろうが）

ところで…。私が世界で最も愛している我が子は、かつて私が世界で最も憎んだあのヒ女ト性にそっくりだ。表情、仕草、性格 etc、その全てを忌み嫌い苦しんだ。

驚いたことに、私はその「偶然」を何の嫌悪もなく受け入れた。我が子はその表情、仕草、性格ゆえに、とても愛しい。もし神様がいて、この「偶然」が神の仕組んだ「必然」なのだとしたら、神は私に一体何を問いかけているのだろう。

答えは未だ見つけていない。ただ、私はあの女性と解りあえない哀しみを埋め合わせるかのように、この子を深く深く愛してしまうのだ。

戸惑いだらけの子育ての中で、はっきり決めていることが一つある。哀しみの連鎖を断ち切り、我が子へはこの不幸を伝えない、ということ。親子のあるべき原点に戻るために。理解し合うために。

だから私はここ（トモエ）に居る。決めたのは最近だ。「問いかけ」の答えはそのうちわかるかもしれないし、わからないままかもしれない。

トモエに出会った偶然。

トモエで知り合った全ての大人達、子ども達、様々な事件に感謝している。

事例（ 10 ） 子育ての不安・つらさ・楽しさ・幸せ

出産後の母親の心理について、もうひとり、2児の母の文章を参照する。

一人目の子が生まれた日、暑い真夏だったにもかかわらず、生まれた赤ん坊が温かくて、いつまでも抱いていたい気持ちだった。そして「満ち足りたとはこのことだ」と心の底から思った。それが、私が母になって最初の幸せだった。温かい赤ん坊の感触やその時の自分の気持ち、疲労感までもしっかりと覚えている。

数年後二人目の子が生まれ、その日の実感はこうだった。「世の男の人たちを越えたな」（すみません）

別に私はバリバリのキャリアウーマンになったこともなければ、人の上に立って仕事をしたこともない。けれどなんの根拠もなく私はそう思った。なぜあの時あんなことが頭をよぎったのか今でも不思議だけれど、母として精一杯役割を果たしたと感じたのかもしれない。もちろん出産の時のみならず、それからの私は必死だった。初めての子育てでも育児書なるものは一切読まず、私は私の感覚でのんびりやっていた。一人目の割りには今思い返してもゆとりがあったと思う。毎日の成長が可愛くて、楽しくてしかたなかった。けれど、だからといって決して私はいい母とはいえなかった。子供達は100%私を必要としてくれるこの世で唯一の存在。私がどんな私でも。全てを許して受け入れてくれる。子供達という事で私は随分自信を持った。そしてそんな私を夫も全く責めずに見守ってきてくれた。サポートしてくれる両親や姉妹もいて、それに加えてトモエがあった。どんなに整った、恵まれた環境で子育てしていても、どんなに精一杯やってきても、日々子供が可愛くて可愛くてたまらなくても、母というものは自分が完璧とはどうしても思えない。自己嫌悪になったり後悔したりの繰り返しだ。時には母としての重荷に逃げ出したくなる時だってある。長男などは今でもその源動力は私との関係がいかにかスムーズか、というところが大きいと感じる。歯車が狂い、大きな修正が必要だった事もある。逃げ出さず、投げ出さず、母としての誇りにかけて…。なんて大げさだけど。たくさんのお愛をくれるこの二人に、私は真正面からぶつかっていかなければいけないのだ。初めての子育てで、泣いてばかりだった赤ん坊と二人で狭いアパートにいと、社会から取り残されたような気にもなった。夫が一分でも早く帰ってくるのを待って、「今日はどれくらいおっぱいをのんでどれくらい寝た」とか、とにかく事細かに報告した。それが自分の存在を示すかのような気がしたのかもしれない。夫も毎日同じような話を根気よくきいてくれた。楽しかったとか幸せだったという想いと背中合わせの辛さがあった。

ここでようやく本題に…。前置きが長くてすみません。私がいいたいのはつまり、母としてこんなふうにな不安を抱えたり辛くなったりするのは正直いって当たり前なのだと思うということ。だって自分の言動の全てが小さな命をどうにでもできてしまう。そんな重い責任は、誰だってプレッシャーにつぶれそうになる。だから園長の書いているような事を、今母になろうとしている人、もしくは母になったばかりの人やその家族の人に読んでもらいたい。母として「私はすごいことをしているんだ」「私は誰にもかわりのできない存在なんだ」と実感しながら過ごすのと、「誰にも認めてもらえない」「社会から取り残されている」という思いで過ごすのでは、母の子育てにおける気持ちの余裕が違おうし、当然育てられる子供への影響力は違おうと思う。

毎日流れる信じ難いようなニュースの中で「幼少期の環境が…」とみんないうのに、問題になるのは犯した罪を罰する為の「少年法」。えらい人がみんなそろって話題はいつも対処のことばかり。どうして「なぜ？」という話にならないのだろう。予防するためにもっと乳幼児期の環境の大切さがクローズアップされてもいいはずなのに…。

先日見たテレビドラマで少年犯罪を取り扱うものがあった。17才の少年は、5才の時に義父から虐待を受けて母からは捨てられ、親戚の家ではそこの子からのいじめを受け、結局会社員を刺し殺してしまった。ドラマの話なのだけど、今の世の中現実でありえない話ではない。むしろかなりリアルだとさえ思う。その少年は警察でこう話すのだ。「お母さん…元気でしたか？あいたいなあ。あいにきてくれますよね。」母親は今の生活が大事だといって拒否しているのに。そして、今お母さんにあつたらどうしたいかと聞かれて、「だっこしてほしい」ともいっていた。ドラマとはわかっているけど、あまりに辛くて泣けてきた。

母の責任は重大だ。けれどどんな人だって責任だけでは大仕事を成し遂げられない。そこに感動や

喜びがなければ。けれど、そんな気持ちを味わいながらゆったりと子育てできるゆとりが、今の母達を囲む環境にはあまりに少ないのだと思う。「あなたはすごいことをしている」と平和の根底を担う立場にいることを、一人でも多くの母に知らせたい。私は園長の「女性と平和論」を読んで、そんなことを思いました。なんだかとりとめのない文ですみません。園長の「思ったままでいいから」という言葉に甘えて、本当に思ったままです。私も熱くなってきています。

事例（１１） 父親は妻の出産をどのように体験したか

妊娠と出産は女性にしか体験できない。しかし男性も、女性の存在価値の素晴らしさを体感することは可能である。夫婦が互いを理解し合い、協力して子育てができるような精神環境を創造することによって、家庭内での人間の尊厳が確立されていくのである。

次のレポートは、父親の立場からの出産体験記である。

前夜、小学部でトモエに泊まったため寝不足で、「今日は早く寝るぞ」と思っていた5月8日の10時頃、陣痛が始まりました。助産師さんを迎えに行き、家に帰ってきたのが夜の12時頃、生まれたのは9日の午後3時35分で、予想以上の長時間になりましたが、自宅で家族揃って新しい家族を迎えることができ、とてもよかったと思っています。

私が自宅で産もう（いや、私が産むのではありませんが。）と考えたのは、裕司が生まれた時の一つの失敗があるからです。

妻から出産の前兆があると連絡を受け職場を早退した私は、当時2才9ヶ月の晃一を車に乗せ、苫小牧に向かいました。家を出たのは夕方だったので、晃一は車の中で眠ってしまいました。苫小牧で、チャイルドシートごと室蘭から迎えに来た妻の父の車に乗せ、私は札幌に戻りました。その夜、私も一緒に病院に行き、翌朝裕司が産まれました。一方、晃一は室蘭について目覚めてから私を探してしばらく泣いていたそうです。後に、私はこのことが晃一の心に大きな傷となって残ってしまったのかもしれないと考えるようになりました。分離不安というものかもしれません。今回の出産で同じことを繰り返したくはありませんでした。

妊娠、出産は、子どもたちにとっても「いのち」を体感できるこれ以上ない機会だと思います。妻のおなかの中で赤ちゃんが動くのを見たり、触ったり、一緒に検診に行ったり、という過程を共有した上で、出産の時を迎えれば、「いのち」のかけがえのなさを肌で感じてもらえるのではないかと思います。自分もこのようにして生まれてきたんだ、ということを感じてみたい、奪いたくない、そう思ったのです。

養老孟司さんが、戦後、日本人は「死」を病院で迎えるようになり、子ども達が「死」を体感する機会がなくなってしまう、そのことが命の尊厳を見失う一因になっている、という趣旨のことを言っていました。この話を聞いて、私は「生」つまり「産まれる」ということも同じではないかと思いました。病院で産むために子どもを排除することは、子どもたちが命の厳粛さを感じる機会を奪ってしまうことになるのではないだろうかと思ったのです。だから、自宅で産みたいと思ったのです（私が産むわけではないのですが。）。晃一は学校を休ませてでも、家族全員で新しい家族を迎えたいと考えていました。

さて、助産師さんに来てはもらったものの、妻は陣痛は来ている、朝まではわりとよく眠ることができました。助産師さんが、「まだ産まれないみたいだから、一旦帰ります。」と言っているうちに、

強く規則正しい陣痛が来て、結局帰らないことになりました。しかし、陣痛が少し弱くなったりして、お産が進みません。助産師さんが、「赤ちゃんがなかなか下がってこない。産道に斜めに入っていて、まっすぐにならない。」と言っていました。一度まっすぐになったのですが、また元に戻ってしまい、お昼になっても産まれてきません。大ベテランの助産師さんにも少し焦りの色が見えました。赤ちゃんの心音には問題はなかったのですが、これ以上時間がかかると母子ともにリスクが大きくなるとのことで、病院に行って赤ちゃんの位置を診てもらったほうがよいと言われました。私たちは何とか自宅で産みたいということにこだわっていました（この時点でまだ自宅出産にこだわっていたのが正しかったのかどうかはわかりません。）が、どうしたらいいのだろうと不安になってきました。

午後3時頃、助産師さんが、「もう一度みて、赤ちゃんの位置に変化がなければ病院に行きましょう。」と言い、内診を始めました。そして、すぐに、「あっ、赤ちゃんがまっすぐになっている。これなら行けるかもしれない。」と言いました。妻が「いきみたくなってきた。」と言い、陣痛にあわせていきみ始めて間もなく、赤ちゃんの頭が出てきました。助産師さんが、「お兄ちゃん達、おいで」と、少し離れて見ていた晃一と裕司をすぐ近くに呼び寄せました。晃一と裕司は赤ちゃんの頭を見て、また少し離れ、部屋の入口に立って見ていました。赤ちゃんが出てきて、元気な産声をあげました。私も妻も泣いていました。私は、「晃一、裕司、おいで。」と声をかけました。見ると晃一は泣いていました。晃一が私のすぐそばに来て、しばらく妻と3人で一緒に泣きました。裕司は思い切りニコニコしていました。

その後しばらく晃一は部屋の隅にあるゴミ箱に座って、私がへその緒を切るところ、助産師さんが赤ちゃんをふくところ、後産の様子などをじっと眺めていました。裕司は相変わらず思い切りニコニコして嬉しそうに部屋の中をチョロチョロして、転んだりしていました。

お産が終わった夜、晃一は、「今日、赤ちゃんが生まれたから、明日、学校は休みを取る。」と言って、結局2日間休みました。そして、2日目の夜、「明日は学校に行く」と言いました。私が、「お母さんはものすごく頑張って赤ちゃんを産んで、しばらく休まなくちゃならないから、送っていけないよ。」というと、「わかってるよ。明日は　　くん（近所のお兄ちゃんのこと）と一緒に行く。」と言いました。

そして、翌朝、そのお兄ちゃんと一緒に学校に行きました。次の日はクラスメートが迎えに来てくれました。そして、3日目は一人で学校に行きました。ちゃんと母親の状況をわかっていて、その状況に応じた対応をしているようです。日が明けて、妻の体力が回復してきたら、またどうなるかわかりませんが、それはその時、晃一の気持ちを受け止めればよいのだと思っています。

お産の翌日、私は晃一と裕司を連れて、トモエに行きました。私が、「お父さんはまず園長に言うてくるから。」というと、晃一は、「じゃ、おれは外にいる人に言うてくる。」と張り切っています。園長がビニールハウスにいて、報告しました。晃一もいろんな人に報告してまわっていたようです。たくさんの方が「おめでとう」と、わがことのように喜んでくれました。

由花が生まれた5月9日、北ノ沢の私の家の周辺は桜が満開でした。由花が産まれる3時間ほど前、助産師さんと昼ご飯を買いに近くのコンビニに行った時、道路沿いに咲いていた桜を見て、この桜が咲いている情景から名前をつけようと考えました。なかなか産まれないことに少し焦りを感じながら見上げた桜を、私はきっと忘れたいと思います。

お産の数日後、晃一が言いました。「オレは女でなくてよかったなあ。だって、赤ちゃん産むの大変だもん。」晃一は出産の大変さを肌で感じたのでしょう。その感覚は、きっと、その大変なことを担う女性への尊敬の念に変わって行くのだろうと思っています。「そうなんだよ。赤ちゃんを産むの

はたいへんなんだよ。だから女の人を大切にしなければいけないんだよ。」というようなことは言わないでおこうと思っています。今回の経験で得た感覚が、晃一の中で女性への尊敬の念に育っていくのを見守ろうと思っています。

私はこれまでも、赤ちゃんはできるだけ多くの人に祝福されて産まれてくるべきだと思っていましたが、トモエでこんなにたくさんの方に祝福していただいて産まれてきた由花は本当に幸せだと思います。トモエに来てすぐに妊娠がわかってから、たくさんの人に助けていただきました。トモエで妊娠生活を送り、出産を迎えることができたことを幸せに思います。

皆さん、本当にありがとうございました。そして、5人になった我が家を今後ともよろしく願います。

事例（12） 人は抱きしめられることで自己存在を確立する

人間は、抱きしめ、抱きしめられることで、自己存在の認識を高め合う。

乳幼児期は、母親の胸の中に抱かれて情緒が安定する。その情緒の安定が、自己存在を認識するエネルギーとなる。母子を無理に引き離すことは、子どもの不安感を増幅させ、自己存在の確固たる基盤を揺るがすことになる。

親の相談を常時受けているが、近年になって圧倒的に増えているのが、自分の母親に安定した抱かれ方をしなかったゆえの不安を訴える母親である。

ある女性は、次のように言う。

「子どもを産んで、母親になりました。でも、可愛いはずの我が子なのに、何故か心から抱きしめることができません。抱っこしても、自分の気持ちがどこか上の空というか、自分の腕の中に何か異質なものがある、という感じなのです。我が子が可愛いと思えない時があり、とても苦しくなります。……」

ある時、気がつきました。自分自身が母親に心から抱かれたことがなかったのだ、と。過去の自分と母親との関係が蘇ってきて、得体の知れない不安感に覆われました。」

女性は、自分が子を産み母親になった時に、特に体感するようである。

男性も似た体験をすることがある。

「自分の両親が孫である我が子を抱いて可愛がっている姿を見て、ショックを受けました。自分は、あのように可愛いと抱きしめられてこなかったのです。」

乳幼児は、母親に抱きしめられ守られなければ、情緒が安定した状態では育たない。抱かれることで情緒が安定し、自己を認識しながら自己存在を確立していくのが人間であることを検証できる。

トモエの親は、我が子だけではなく多くの乳幼児と関わり、抱きしめながら、人間の存在の素晴らしさや可能性を体感している。乳幼児を通して自己存在を確認しているのである。

抱きしめ抱きしめられることは、乳幼児にとっても大人にとっても重要なことである。情緒を安定させ、心を癒し、自己存在の認識を高め合うことができるのである。母子関係は、あたたかな心を互いに育む関係にあることを、人間は心にとどめておくべきである。

事例（13） 女性と男性には大きな違いがある

人間には何故、女性と男性があるのか。これは人間を探究する上でも大きな謎のひとつである。

妊娠と出産を体験できるか否かという点において、女性と男性には最も際立った相違点がある。そ

れ以外にも、肉体的にはもちろんのこと、精神的な面でも、両性の間には様々な違いが認められる。

トモエの生活環境では、たくさんの女性と男性が関わり合っている。互いの働きの違いを認め合うことのできる関係を、生活体験の中で自分のものとしているのである。

子どもだけではなく親も参加することで、家族間の交流が広がっている。これが、女性と男性の違いを理解し体感することにつながっている。

ある父親の報告である。

「我が家には男の子しかいないのですが、先日女の子が家に遊びに来ました。息子の友達です。私も一緒になってふざけたりじゃらけあったりして遊びました。みんなで盛り上がったので、一晩泊まっていてくれました。一緒に御飯を食べたり御風呂に入ったり、布団の中で絵本を読んだりしている時も、女の子が一人増えるだけで、何だかいつもと家の中の雰囲気が違うんですよ。女の子は、身体的にもそうなのですが、感覚的に、男の子とは違うなあと感じました。

楽しいだけではなくて、いろいろと考えさせられました。自分と妻との関係についても、妻という人と話すことができました。お互いに一個の人間という点では同じなのですが、それでも、男と女は完全に違う動物なのではないか、という気がするのです。」

これは、女の子ばかりの家に男の子が遊びに行く時にも、同様の体験がある。子どもたちの姿を通して、自分たちの姿も客観的に見ることが容易になるのである。

トモエでは、互いに気の合う家族間で意識的に交流し関わり合い、夫婦で考え合って、互いの性の違いを理解し認め合えるように、精神環境を創造している。

事例（14） 赤ちゃんに関わることの幸せ

トモエには、毎日10～20人の乳児たちも参加している。母親たちは、園児に赤ちゃんを抱っこさせてくれる。弟妹のいない幼児にとっては、赤ちゃんを抱っこしあやす体験は、生命の存在の愛おしさと尊厳を肌で体感できる、最高のプレゼントである。園児たちは、乳児に対する優しさや配慮など、本能的で動物的な感覚を育てることができる。

現代社会では、子どもを産んでも我が子が可愛いと思えない、という母親が増えている。トモエの母親たちは、我が子以外の乳児と関わることで、本能をより深く刺激され、子どもへの愛情を育てている。

以下は、トモエの乳児たちの様子をレポートした、スタッフの文である。

トモエのベビーコーナーには毎日たくさんの赤ちゃんがすごす様になってきています。ときどき赤ちゃんコーナーですごしている赤ちゃんの顔をのぞきこんだり話しかけたりすると、私の心もなごみ、やさしくなる様な気がします。生後1ヶ月の赤ちゃんに話しかけると、赤ちゃんは小さな口をいろいろな形に動かし話しかけて反応してくれるのです。そうすると、たまらなくうれしいものです。

ベビーコーナー（妊産婦の体を休める場でもあります）に園児や小学生たちも、赤ちゃんを抱っこさせてもらったりあやしている姿は、よく見られる光景となっています。園児や小学生が赤ちゃんに関わってゆくことができ、将来は子どもの心を考えながら親となり大人となって育ててゆけるだろうなあーと、赤ちゃん子どもたちの関わりを見ながら、何かしらほのぼのとしたものを感じます。今から子育ての学びを実習しているのですね。

妊娠しているお母さん、子育て真っ最中のお母さん方にとっては、ベビーコーナーは井戸端会議の

場でもあり、お互いの子育てや親の悩み等の情報交換の場にもなっているでしょう。親にとっては特別な専門機関に出掛けなくても、ベビーコーナー、トモエの中で相談し合ったり、よきアドバイスを受けることができるのも、トモエの魅力のひとつですね。

トモエのお母さん方のすごい所のひとつは、生後1ヶ月経つとすぐにトモエに赤ちゃんをつれてきて堂々と生活していることです(上の子との関わりもあるでしょうけど)。私も、今では“ああ、もう1ヶ月ですものね”と当たり前のように云える様になったのですが、はじめの頃は“ええ、まだ1ヶ月しか経っていないのに大丈夫ですか?”と、ヒヤヒヤドキドキしていた頃もありました。

知人、友人たちに“トモエのお母さん方は生後1ヶ月経つとトモエに連れてきているんですよ”と話すと、“ええ、とても考えられないですね”とおどろきのことばが返ってきます。

私も特に0才児をもつお母さん方から赤ちゃんの情報を聞きたくて、ときどき話を聞く様にしています。

あるお母さんは...。「家にいると食欲がないけど、トモエにくると食欲(離乳食も含めて)がありますね。」

- 赤ちゃんはトモエで、より五感が刺激されるし、又、沢山の人々との関わりでエネルギーも使い、快の状況になり、食欲も出てくるのでしょうか。 -

お母さん・その2...。「トモエにいと、家にいるときよりも機嫌がよいので。また、トモエにいと、はじめはうるさい中で寝ない子も、慣れてくると、あのさわがしい中でもぐっすり眠るようになりましたね。夜泣きも余りしないですね。」

- 活気ある音の中できたえられ、神経も太い子に育てられますね。 -

お母さん・その3...。「表情に変化がでてきて、よく笑う様になります。」

- 目から耳から、人に慣れて、刺激いっぱいコーナーですね。 -

そして、こんな話も...。「こんなに小さいうちからこの様な環境ですごせて幸せですよ。私が小さい頃はこのような環境はあったけれど、今はもうこんな環境はないですものね。」と。

家で赤ちゃんとも2人3人ですごしていると、洗濯、掃除、食事...等々、主婦業に忙しく追われ、又、狭い家の中で親子だけですごしていると、子どもの言動が身近に目に入り、つい口も多くなってくるのは仕方のないことです。時には家で家族だけでホッとしてすごす時必要でしょうけど...

それに比べて、ベビーコーナーですごしている0才児たちの生活はどうだろうか? あの黄色い格子の間から、うつぶせになったりハイハイしながら、お母さんに抱っこされオッパイをのみながら、園舎内の子どもたちや大人たちの様子をみたり、又、静かな曲、リズムカルな曲、活気ある声等を、時にはうるさく時には快く聞いていることでしょう。

外に散歩に出掛けると、美しい緑が視界に入り、自然界の様々な音も耳から入ってきて、心もより落ち着くことでしょう。

ベビーコーナーで寝ていて目が覚めても、その時まわりにたくさんの赤ちゃん仲間や大人がそばにいたので、不安も少なからず取り除かれていると思います。目が覚めた時に(目が覚めている時でも)そばに誰かがいてくれたり、時には抱っこしてくれると安心できるものです。

自分の母親のみならず、園児はじめ小学生や多くの大人たちに抱っこされあやされて育てられている、0才児の赤ちゃんたち。

0才児の赤ちゃんたちは、トモエの環境の人と自然からたくさんの刺激を受け、その上まだ柔らかな心にはたくさんのものが吸収されてゆきます。ですから、胎児の時からトモエにきている1~2才児たちの言動は、安心して見ていられるものがあります。

0才の時からこれだけ多くの人々と関わっていると、大人になっても、人との関係ができない、人がこわい、という様な人間が育つことは少ないのではないのでしょうか。今の子どもたちは、テレビ、ファミコン、テレビゲーム...等々、視覚・聴覚のみが極端に刺激され、アンバランスに五感が育てられてきています。その様な中で、0才児の赤ちゃんたちは多くの人々と自然の生活の中から刺激を受け、五感もバランスよく育ってゆく環境にあります。

私も又、その様なバランスよく育っている0才児の赤ちゃんたちと関わる毎日に幸せを感じながら...

事例(15) 人が人を好きになることの不思議

1歳の女の子は、三人兄妹の末っ子。いつもニコニコと愛敬をふりまいている。11歳の男の子は、別の家族の三人兄妹の長男である。卒園生で、時々トモエに遊びに来る。この二人が、とても良い関係なのである。

女の子は、このお兄ちゃんが大好きで、いつも抱っこしてもらったり、追いかけてっこをして遊んでいる。男の子の方も、女の子を可愛がって、あれこれと世話をやいている。お互いに共感を響かせ合い、楽しみながら関わっている。周囲の人々も、この二人の様子を微笑ましく見守っている。

ある時、男の子は、女の子の心を試してみた。女の子の母親に女の子を抱っこさせて、素早く逃げて隠れようとした。すると女の子は、飛びはねるように母親から無理やり降りて、お兄ちゃんの後を泣きながら追いかける。大粒の涙をこぼしながら飛びついてきた女の子を抱き上げながら、「やっぱし、そうか、そんなにオレのことが好きなのか」と満足そうな顔をしている。

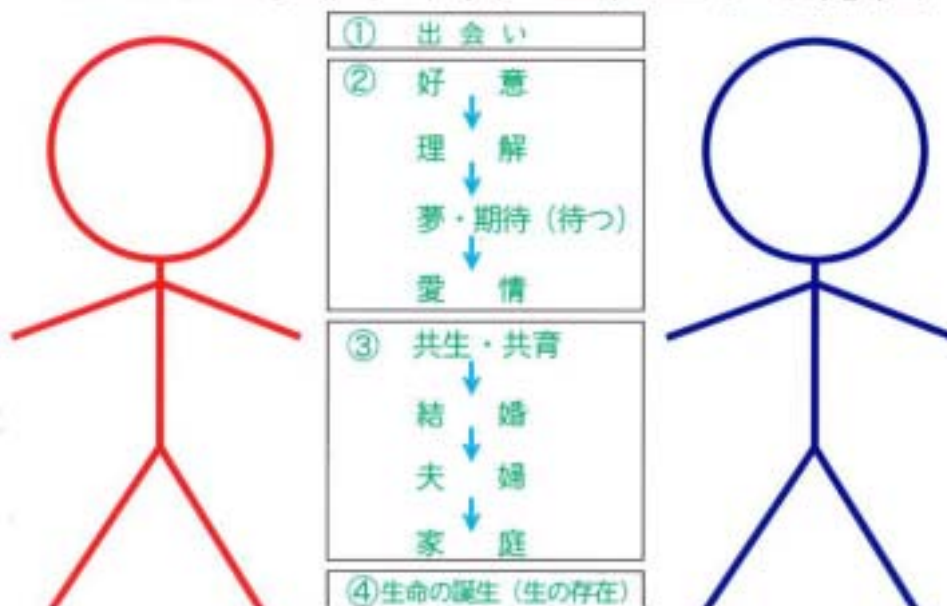
人が人を好きになるということの不思議を、彼らは感じさせてくれるのである。

このような例は、トモエでは非常に多く見られる。乳幼児から大人たちまで、互いに心を開き、関係を深めている。

乳幼児を核として、あたたかな心の交流が広がり、自他の存在を尊び合う生活環境を、トモエは創造しているのである。

<参考資料>

ひとりの人間(命)が誕生する行程



* 年齢による脳の発達の状況 『脳と保育』時実利彦（雷鳥社）より

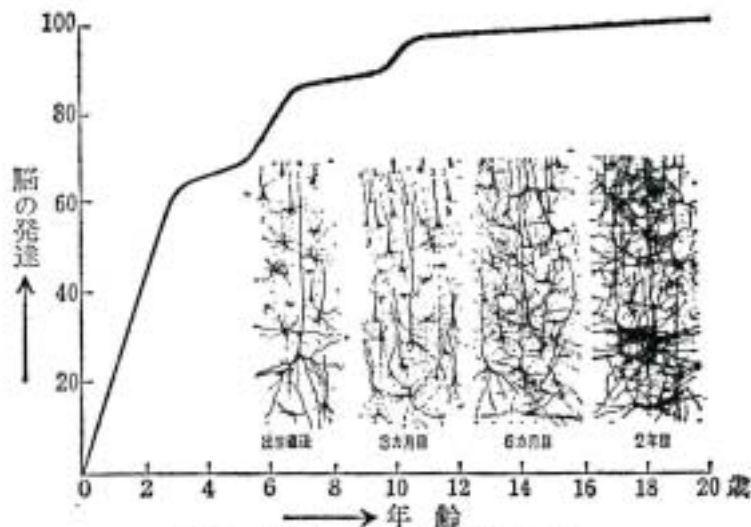


図4 年齢による脳の発達の状況

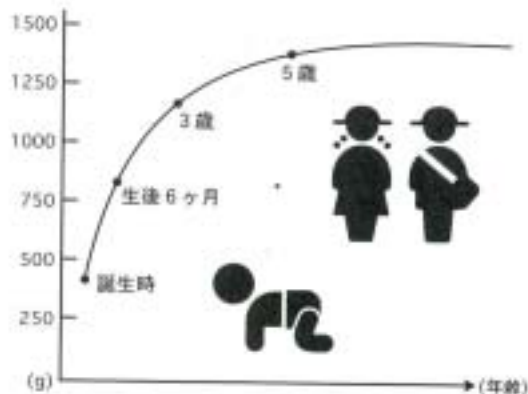
* 『赤ちゃんの脳科学』小西行郎（集英社新書）より

『人間の脳はおよそ 1300～1400 グラムだといわれています。一方、生まれたての赤ちゃんの脳は、わずか 400 グラム前後です。それが生後6ヶ月になると2倍、3歳で3倍、5歳になると成人とほぼ同じ重さに増えていきます。』

『脳科学で「脳が発達する」という場合、次節に述べるように、神経細胞（ニューロン）が発生して数が増え、他の神経細胞と結びつくことを指しています。つまり、単に量的な増加を問題にしているのではなく、脳が大きくなる際、神経細胞同士がいかにネットワークを形成するかが大事なポイントとなるのです。』

『2002年3月から「脳科学と教育」という文部科学省のプロジェクトの準備が始まり、私もそれに参加しています。このプロジェクトでは、学習をはじめとする外的刺激が有効に作用する段階、これを本来「感受性期」というべきではないかと考えています。ですから、「どのような刺激が好ましいのか」を含めて、「人間の個々の感受性期をどのように見つけるべきか」が大きな課題となっています。』

さらに私は、第一に安定した人間環境（親子、友人、先生、地域社会）があること、第二に学習の過程が正しく評価されるシステムが整っていることが重要であると考えています。つまり、周囲の人々とともに何をしたいのかを考え、学習の成果だけではなく、その過程における努力や工夫も正当に評価されることが望ましいのではないのでしょうか。』



■ 脳の重量の発達
 (『これで安心 0歳からの育児』小西行郎著 法研より改定)

21 世紀は、科学技術を飛躍的に進展させた要素還元論の時代から、俯瞰型統合論の時代へと徐々に移行しつつある。デカルトは要素還元論でよく知られるが、一方で、総合の過程についても言及している。物事を要素に分けて個別に理解した後は、降りてきた階段を上り詰めるように、分解した要素を再び統合して初めて全体システムを明晰に理解できるとした。この趣旨を基調にして、統合された多くの事象をさらに包括的に見渡す立場が、俯瞰型統合論である。要素へ分解して理解する過程はマクロからミクロへのアプローチであり、要素を統合する過程はミクロからマクロへのアプローチである。この二つの過程は車の両輪として、21 世紀の学問分野とその応用分野を新たな方向へと駆動し、俯瞰型統合論へ向かうのではないか。ここに、人文・社会科学と自然科学の架橋・融合が生まれてくる。この架橋・融合のスキームは、TD (Trans - disciplinarity) という概念で捉えることができる (1)。

TD の概念には、距離の遠い異分野間の架橋・融合のほかに、もう一つ大切な要素が含まれる。現在までに多くの practitioner と呼ばれる人々の努力の結晶である現場の知識・知恵を、scholar・scientist と呼ばれる人々との共同作業によって体系化する過程である。言い換えれば、現場に蓄積されてきた暗黙知を、形式知へと整理・明確化する過程である。また、人文・社会科学を精密科学と連結する際には、事実関係の客観的把握のために、広義の計測概念並びに新たな脳機能計測の方法論開発が必要となる。

現在、この TD の一つの典型的な分野として、「脳科学と教育」(あるいは「脳を育む」) という新領域が創生されつつある。ここでは「学習」と「教育」の概念を生物学的視座から新たに定義する。即ち、「学習」を「環境(自分以外の全て)からの外部刺激によって脳の神経回路を構築する過程」、「教育」を「学習者への外部刺激を制御・補填する過程」と捉える。すると、命の始まりである胎児期から乳幼児期、青少年期、高齢期を経てやがて死に至るまで、人間の一生を通じた学習・教育の概念を包括的に扱うことが可能になる (2)。

「遺伝因子と環境因子」(nature/nurture、genetic /epigenetic) の実態を把握し、また個々の脳機能について神経回路網構築の「可塑性」や「騙界期・感受性期」を解明することも重要な課題である。さらに、学習・教育を脳の知見から支援するためには、高次脳機能に関する「領域特異性」の問題も、同時に解明する必要がある。視覚・聴覚・体性感覚の個別機能は局在化されているが、

感覚統合並びにさらに高次な機能(思考・記憶・言語他)を形成するネットワーク関係、そして階層構造を知らねばならない。

この包括的な教育耗念の中で一生の基盤となる神経回路網が構築される時期、即ち、胎児期・乳幼児期は極めて重要な意味をもつ。赤ちゃんという生命が、これから生きて行く環境によりよく適応するための過程・時機として位置付けられているからである。この時期には、神経過剰形成・シナプス過剰形成が生じ、かつ、アポトーシスによって脳の内部で淘汰が起こる。環境によりよく適応するための生物としての側面であるが、嘗て動物実験で得られた知見が、人についても少しずつ明らかになってきた。以前は視覚野についての研究が中心であったが、最近では言語の発達についても、環境適応に関する知見が行動科学的実験から明らかにされつつある。

一方で、機能的磁気共鳴描画や脳磁図などの非侵襲脳機能描画法の急速な発展により、人間の精神活動を含めた高次脳機能を、安全に計測することが可能となってきた。これは、教育学・保育学など人文・社会科学の領域も、自然科学の範疇で研究可能であることを意味する。

このような研究を、人について安全かつ縦断的・経時的に行うために、我々は光トポグラフィ法という新たな高次脳機能描画法を開発した。この方法では完全無侵襲的かつ自然な環境下で計測が可能である。最近、この光トポグラフィ法によって、赤ちゃんが誕生以前に母国語の学習を始めていることを明らかにした(フランス他との共同研究)。聴覚野は妊娠後 30 週で髄鞘化もほぼ完成する。胎内の羊水環境中で、胎児が母親や外部の会話を聞いている可能性は高い。羊水中では音声の高周波成分はカットされるが、言語の抑揚や律動は胎児に聞こえていると考えられる。

現代の効率優先の社会、そして人工化された環境の中で、次の世代の健やかな心身を育むためには、「脳科学と教育」研究こそ焦眉の急であろう。

参考文献

- 1) H.Koizumi, "A practical approach towards trans - disciplin - ary studies for the 21st century、J. Seizon and Life Sci., 9、 5 - 24、 (1999).
- 2) H. Koizumi, "The concept of developing the brain : a natural science for learning and education" .The trans - disciplinary symposium on the frontier of mind - brain science and it's practical applications ()(H. Koizumi, ed.)、 . p217 - 219、 Hitachi、 Ltd、 Tokyo、 (2000).

<参考文献>

- * 『驚異の小宇宙・人体～生命誕生』(NHK出版)
- * 『驚異の小宇宙・脳と心～人はなぜ愛するのか(感情)』(NHK出版)
- * 『驚異の小宇宙・脳と心～果てしなき脳宇宙(無意識と創造性)』(NHK出版)
- * 『こころと治癒力』ビル・モイヤーズ(草思社)
- * 『輝け我が命の日々よ』西川喜作(新潮社)
- * 『心が脳を変える』J.シュウォーツ・S.ベグレイ(サンマーク出版)
- * 『幼児教育と脳』澤口俊之(文春新書)